

民俗博物館だより

Vol. X VIII No. 3

1993. 3. 31



▲吉野の樽丸づくり(黒滝村中戸)

目次

データベース事始め..... 1

民俗資料聞き書き短信 18

黒滝村赤滝の民俗..... 3

お知らせ..... 7

データベース事始め

大宮 守人

1. データベースとは

各方面でデータベースの重要性が囁かれているが、一朝一夕に出来るはずのものでもない。しかし、このことについて検討してみるとは組織や個人の役割を再点検しそれを評価し直す良い契機となり、延いてはその活性化につながるという視点は正論と言えよう。

いまさらデータベースでもあるまいとも思う。もともと博物館はその館が扱うテーマに関する文物を収集保管、調査研究しその成果を展示や講座、印刷物を通じて普及を図るという使命を持つ機関であってデータベースであることがその機能の中に大きな比重をもって含まれているといえるからだ。しかし、これはひとり博物館に限らず、他のいかなる機関においても存在する共通の機能でもある。

ではそれらと博物館のそれとはどこが異なるのか。広い意味ではそれほどの違いはなさそうである。強いていえば博物館は文章化されていない現物、または実物に重きを置くという点であろうか。

それぞれの事業体で創業以来の文物を集めて、〇〇博物館、〇〇記念館などが作られる所以がそこにある。市史、社史の編纂などは収集した資料を文章化し、写真化したもので、集められた資料の活用の一例であろう。捨てられてしまえば単なるガラクタであるものが、ひとつの目的のために集められなんらかの意味を持つものとして価値を発揮する姿である。

データベース＝情報基盤であって情報そのものではない。情報とはある目的行為のなかから引き出されてくるものであり、それは視点の置き方によって図り知れないほどのバリエーションと意味を持たせうるのである。この点でデータベース＝情報基盤の重要性がうかびあがって来るのであるが、その構築には膨大な人手を要し、一朝一夕にできるものではない。調査、収集、選択、分類、保管、出納などの作業、コンピューターが普及したとはいえ、データの入力をはじめとして多くは価値判断のできる人間の関与なしにはできない作業であり、構築の具体的な作業には、効率面における問題点も多い。現物を主に扱う

博物館などでは尚更である。

ハードウェアとしての当民俗博物館は、奈良県庶民の暮らしの変遷に関する文物の蓄積と活用のための文化施設である。また、これを効果的に運転するにはソフトウェアが必要で学芸員はじめ職員が個々のアプリケーションである。さらにアプリケーションの機能を十分に使いこなし働かせるための環境（太陽、空気、水、土壌、養分など）を提供するソフトウェアが必要なのである。パソコンでいえばO.S（オペレーションシステム＝その自然的環境が稲作に向くのか畑作か、または牧畜か、そしてそこに展開される社会的環境によってもその中身は著しく異なる）である。

2. 暮らしの現状

「コンピューター技術とコミュニケーション技術を融合すれば、社会を根底から変える情報インフラストラクチャーを構築できる。それは、農業時代の農産物や工業時代の動力燃料のように、来たるべき時代の基盤となるものである」という科学雑誌^{〔註〕}の見出しを見て、何年か前（かれこれ10年ぐらいにはなろうか）アルビントフラーの『第三の波』を思い出した。十年一昔とは過去のこと、今は三年一昔の時代と言われているが、我々の日常生活の場ではどのような『第三の波』の影響が現われているのか、と考えてみた。衣食住の面では外見上さほど大きな変化は無かったように思う。では、その波の正体といわれる情報についてはどうか。ありとあらゆる情報が溢れその取捨選択に苦慮しながらも文化的生活の向上や物事の解決にそれが寄与し何らかの具体的な成果が眼前にあるのだろうか。確かに、ダイレクトメールの量は増えたりワープロ・パソコン・ファミコンなどの情報機器は仕事や生活の場を問わず行き渡ったと言われているのだが。

結局、便利だといわれるこれらの機器も文章・データを入力しなければならにも始まらないし、データ処理をするためのソフトウェアの開発では、そのアイデアや気の遠くなるような細かな開発作業を人間に変わって機械

がしてくれるわけではない。そして、一気に最高に便利なものが出来上がるわけではなく、徐々に改良を加えられて半年ごとに新製品が市場に送り出されてくる。時にデータやソフトの互換性の問題に泣かされたり、もう少し買ひ足せば何とかなるのだろうかという思いに地団駄を踏むということの連続のようで、悪質な冗談に翻弄されている気さえするのである。発想力と機動性を要する部分は人間技でなければならぬことを悟らなければとんでもない泥沼で右往左往することになるし、何が目的でそのために基本的に大事なことは何かを見失ってはならないということである。結局最も大事なのは何に価値を見いだしどのような暮らしぶりを理想とするのかというライフスタイル＝文化の問題が根本にあることに気付かなければならないだろう。そうでなければたとえばパソコンに見たような悲喜劇の連続から抜け出せずその泥沼にとどまり続けることになるのではなからうか。それは自動車でいえば、ハンドルやブレーキやクラッチの付く位置が異なる自動車に闇雲に次から次へ乗れと言われるようなものではないかと思う。あらゆる仕事において重要なことは、そんな皮相の名人芸ではなくどこに注意をはらうべきか、労力をつぎ込むべきかを冷静に見極めることであり、それができる環境づくりである。

あたらしい便利な道具類のなかから使えるものを選ぶ基準もやはりそうした点に帰するであろう。道具とはいかにハイテク、最先端のものであっても、手の、そして人間の五感の延長であるべきだ。道具を使った結果またはそのプロセスにおいても人間の本質的な感覚、感触から大きく隔たるものは、いい道具とはいえないのではないか。本当の道具とは、知恵とはなにか、我々にとって好ましい生活様式（ライフスタイル）とは。これが問われ

ているのが現代ではないのか。この答えは誰かが正解を出せば全て片付くというようなものではなく多様な価値観の並存の中で自らが掘り起こさねばならぬのが真実ではなからうか。そのためには、入手可能な今日までの暮らしに関するあらゆる資料データを収集し、情報基盤（データベース）として蓄積しておくかねばならないと思うのである。

3. この博物館の役割

当民俗博物館はまさにそのために建てられ、今日まで様々な民俗資料・生活資料を集めてきたが、それらは急激な暮らしぶりの変化に伴い不要になった生活用具であり、平たく言えば大型ゴミなのである。しかし、当館に持ち込まれたからには単なる大型ゴミでは終わらないのである。我々の文化が排出した排泄物、自身の文化的健康度を測る大事な資料として活用されなければならない。

いま、この博物館には昭和46年以来収集した21,000点（登録分のみ）以上の有形民俗資料、5,000点以上の写真資料とAV資料、7,000点以上の図書資料などの資料的蓄積がある。さらに、民俗博物館を取り巻く大和民俗公園に移築復原されている県内各地域を代表する伝統的民家や園内に広がっている伝統的な里山としての保存林、水田や溜池など生活の古典を物語る文物と景観に満ち溢れるこの公園は、それ自体テーマパークであり野外博物館といえよう。

このコーナーではこうしたトータルな視点から持てるもの全てをデータベースと捉え、全貌のほんの一角であるが僅かに明らかにし得たその価値をランダムに取り上げて行く。そして、我々庶民文化の正倉院となるような本格的なデータベース構築へのステップにしたいと考える。（次回）

[注] 日経サイエンス91/11「成長するネットワークは社会になにをもたらすか」M.L.デルトゥー



▲大和民俗公園町屋集落



▲民俗博物館収蔵庫内部

黒滝村赤滝の民俗

1. まつりを中心に 2. 山の仕事、樽丸師の仕事

浦西 勉

赤滝村は、吉野郡黒滝村の最東部に位置する。又、吉野川支流、丹生川最上流に位置する村落である。村内の中央に丹生川の支流、赤滝川が東西に流れ、その川沿いに人家が並ぶようにして建つ。人家のまとまりを垣内に分けており、川下から

タンド（田戸）垣内（1班・2班）

アンジャ（安蛇）垣内（3班・4班）

久保垣内（5班・6班・7班）

キタノ（北野）垣内（8班）

日浦垣内（9班）

となっている。今、約60戸の人家がある。かつてのくらしの基本は、主に、山の林業に関する仕事であった。明治初期『大和国町村誌』には次のごとく記されている。

田 二町六反八畝二歩

畑 六町九反五畝一步

宅地 一町四反三畝二十歩

山林 五百七十二町九畝二十七歩

戸数 六十戸

口数 二百九十四人

物産 杉・桧・楠 二十萬本

杉・桧材木三千床

樽丸 五百駄

今日、水田は見当たらない。人家の周囲に畑が見渡せる。その畑の周囲は、植林された杉・桧の山である。なお、赤滝村の東は川上村高原で、その境に大峯山奥駈けの道がある。

1. まつりを中心に

この地における村人の主なまつりについて、報告してゆく。参考のために、下に村の概念図と、その中に信仰の対象となるものについて示した。

ア. 黒滝村赤滝の山の神まつり

12月7日（6日の夜はヨミヤ）。班に分れて順番に当番を受け持つ。当番の家にて餅を

吉野郡黒滝村赤滝概念地図



位置



作り、供え物を用意して、夜に山の神に参る。かつては、山林業をしていた親方（山守りの親方など）の家に、山仕事をする労働者が集まり御馳走になった。

山林業事業主を山守りさんともいう。小林・山口・上田・中井・喜多・福西家が事業主であった。山林所有者から山を預かり、山林経営をする人である。山の神の日は休日であって、村の山の神にお参りしてから、事業主の家でよばれる。

今日では、赤滝の山の神まつりは各班（垣内）が準備に当たり、12月6日の夜に班長宅に班の者が集合して、前日擲いた餅を山の神さんまで車で運ぶ。山の神は村の奥、赤滝川の上流にあり、祠の前に男根がまつられている。これは本来なくて、四国から来た人が作ったという。山の神の祠の前で、かがり火を焚き、8時頃から人々は参りにくる。参る人々に当番の人がお神酒を配る。参る人は、祠の前にて手を合わせて帰る。7日午後、役員が山の神さんの祠の前にておまつりをしてから、場所を移動し、赤滝の村内の中心にある元小学校のグラウンドにて餅まき（ゴクマキ）をする。たいへんなにぎわいである。

この黒滝村の山の神まつりは、ほとんどの場合12月7日で、午後から村の山の神の祠に役員が山仕事の人が集まり、餅を供え、お神酒をもらい、その後、餅まきをする。脇川・寺戸・中戸など、すべてよく似ている。村人達は男、女、子供など多くの人々が出てきて餅を拾い合う。

イ. 河分神社

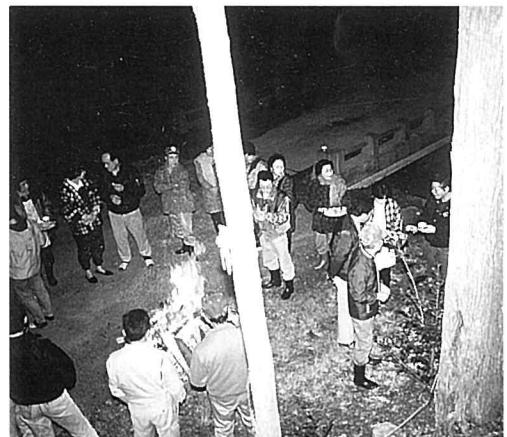


▲黒滝村赤滝の山の神のほくら。集落から500メートルほど離れた道の脇にある。

赤滝の人々は、黒滝村中戸にある河分神社の氏子になる。この河分神社は、赤滝・中戸・寺戸・脇川・堂原・御吉野の6ヶ大字の神社である。神社境内には杉の大木があり、赤滝川と中戸の小南からくる川谷川との合流点にある。神社のまつりは、正月元旦・祈念祭3月・夏まつり6月5日（今は第一日曜日）・秋まつり11月3日・新嘗祭11月23日に行われる。組織は、各大字で氏子総代2、3名が代表となり、その中で代表役員が決まる。今は代表役員は辻村さん・鎌田さんと決まっている。昔、秋まつりは、サルトリマツリといって、12月16日・17日頃であった。雪が降ることも多かった。サバまつりともいい、鯖を売る店が出て、お参りした人が鯖を買って帰った。

今日は、11月3日が秋まつりで、秋まつりの前日、餅つきを行う。秋まつりの当日の次第は次の通りである。

- (1) まず、境内にてまつりに参加する人々が2列に並ぶ。一方は神主（1人）・楽人（5人）・みこさん（5人）、他方は氏子代表が各大字から出て並ぶ。
- (2) おはらいをして、拝殿に移動する。
- (3) 神饌を供える。
- (4) 神主（宮司）が神前にのぼり、祝詞をとる。
- (5) みこが、うらやすの舞を舞う。みこさんは、小学5、6年生の女の子で、春日神社で講習を受けて、数年前から行うようになった。
- (6) 代表者が玉串宝奠をする。



▲12月6日の山の神祭りのヨミヤの風景。焚き火の周りに村人が集まり歓談する。

(7) 御供(餅)まきをする。村の人は餅を拾い合う。

当日、露店が出て賑わう。

なお、夏まつりの6月5日は、神社境内で子供相撲がある。

ウ. 赤滝の寺の行事

赤滝の寺、善竜寺は、村の中心部に位置し、人々の結び付きが強いと思われる。浄土真宗本願寺派に属す。黒滝村はすべて浄土真宗で1ヶ所が大谷派で、他は本願寺派である。

お寺の行事は、正月、夜にあり。3月彼岸・4月春の永代経・5月虫供養(昔は山を焼いたヤケノでマグサ刈りをした。焼く時虫を殺すので、虫の供養をする)・9月秋の彼岸・10月末報恩講(説教師を雇って3夜)。寺の報恩講は、昔は多くの人が集まった。

「ええ話聞きに行こう」といい、たくさん寺へ行った。説教師は、他の村の僧侶が来る。各家の報恩講は冬にする。次のページの表に示した黒滝村の寺院の本尊等により寺院創立期が推定できる。これによって、真宗の形態による報恩講・永代経が少なくとも江戸時代初めから続けられていると推定される。正信偈の唱和や御文章・説教のウエイトがきわめて高いのが特色として認められる。

エ. その他のまつり

(イ) フイゴまつりもあった。フイゴをこしらえて、正月にお餅・ミカン・コブをフイゴの上に載せておまつりをした。フイゴは、石を割るノミ・山の道具の修繕などに使用していた。また、川戸のカマタさん・寺戸のヤスミチさん・

道下さんなどが専門の鍛冶屋でいた。主にヨキを打ってもらう。他、樽丸の道具・トチカン・ワなどを打ってもらった。

(ロ) 地藏さんのまつり

地藏盆にする(8月24日)。穴のあいた石を吊ると耳の通りがよくなるという。

2. 山の仕事・樽丸師の仕事

ア. 山の仕事

山の仕事の1年：かつての村の人々の多くは山の仕事をしており、1年のサイクルはその山の仕事と深く関係していた。

山仕事は、苗植え・枝打ち・伐採などの仕事があった。山の仕事をする人の1年は、おおまかにいって4月から9月まで間伐・皆伐・下刈りや杉の皮むきの作業で、9月から11月までは切り倒した木のうち太い木は山で干し、細い木はシュラ・トチカン・木馬で山から川まで出し、11月から3、4月まで筏で出した。これが1年のサイクルである。

筏流し：筏に乗る人は、10月に川作りといって、川の石を避けて筏を流しやすくしておく。又、筏には藤蔓が必要であるので、早いうちに用意して水に浸けておく。筏流しは11月頃から3月・4月の田の水を取る時までです。12床^{とこ}が一つのまとまりで、できたら送る(半分の6床で流すこともあった)。休みなしで2日・3日流した。正月であっても仕事をした。赤滝の人は寺戸まで筏を流す。赤滝からは12床を1日2回、寺戸のデアイのセギまで流す。寺戸の人は、次に中継ぎをして丹生のマス忠の近くまで(玉木さんの前にイデ



▲黒滝村中戸の河分神社の秋祭り。うらやすの舞いを舞う。赤滝の人も参加する。



▲秋祭りの儀式が終わると餅まきが始まる。歓声を上げ拾い合う。

あり)。次に、西吉野村十日市へ。そこから五条市霊安寺まで流す。

山仕事の賃金：1日、50～80銭で下刈り、80銭～1円50銭で一人前。樽丸師・木馬引き・筏師はそれより日当(賃金)が良い。

植林の杉桧：赤滝には1,200町の山があり、杉6割・桧4割の人工林である。1反で100本から80本植える。杉はサコアイの良い所に植える。桧は屋根のある方に植える。黒滝村では、特に、栗飯谷の桧が良い。赤滝は杉が良い。ノコシギというのが、必ず山にある。200年以上もの木である。山を全部筏ってもこの木だけは残す。

間伐材：間伐材は、アシバ、3寸角・4寸角に出した。桧の間伐材はマルバシの削りものに出た。マルバシには、ミゾカンナ・ヤリカンナを使用して、30～40年前まで作っていた。

イ．吉野の樽丸師〔表紙写真参照〕

この地には、樽丸師(マルシ・クレシともいう)と呼ばれる桶の材料を作る人が多かった。樽丸を作るには、サッキヤマ・ワリヤ・サキ・カシキ(クレホシ)という人が役割を定めて仕事をした。作業は(1)サッキヤマ(2)コギリ(3)オーワリ(4)コワリ(5)ク

レヤ(6)サキ(7)クレホシがあった。山の中でリンバにてコギリをし、小屋をかけてワリヤとサキが(3)～(6)の作業をした。**樽丸の製品：**樽丸の杉の場合、50年以上80年から90年の杉が良かった。コウツキは赤の入っているもので最上、メアイの良い、色合いの良いものを最良とした。

樽丸の製品には、次のものがある。

シャクハチ(尺八)……四斗樽

シャクイチ(尺一)……一斗樽

シャクゴ(尺五)……二斗樽

樽丸の製品は、樽丸を並べて12尺をイチダといい、それを3段、竹の輪に入れる。これをヒトマルという。しかし、実際、ヒトマルは33尺6寸であるので、12尺3段の36尺の樽丸は、ヒトマルにすると2尺4寸残る。この2尺4寸分は、マルシの棟梁の報酬である。尺一の場合、10尺4段でヒトマルという。マルシの棟梁とは、山の世話人である。

樽丸師の組織：樽丸師の組織は、山の木を買って、樽丸製造事業をする人を親方とする。その親方に、樽丸師の棟梁がヒトマル何円の作業賃を交渉する。そして、マルシ(作業をする人)が、実際に仕事をする。親方が山の木を買っておき、春4月、その杉山を切って、

寺院名	村名	寺院創始に関する遺品
祐光寺(本)	笠本	本尊阿弥陀如来立像(文禄二(1593)癸巳五月五日本山下付) (備)同村岩井氏宅に伝蓮如上人御真筆の六字尊号あり。
称念寺(本)	桂原	木仏尊「釈法如、宝暦元(1751)末年極月二十四日、願行寺門徒滝上寺下、吉野郡黒滝郷桂原村惣道場称念寺」の銘文あり。
光明寺(本)	長瀬	「和州吉野郡長瀬村、惣道場、慶長十八年(1613)癸丑十月八日、釈准如(花押)」
専行寺(本)	御吉野	本尊阿弥陀如来像(寛永六年(1629)本山下付)
蓮光寺(本)	堂野	本尊阿弥陀如来像(寛永六年本山下付)
遍照寺(本)	寺戸	本尊阿弥陀如来立像(万治元年(1658)本山下付) 七高僧画像と聖徳太子画像の裏書 「本願寺釈良如(花押)、萬治元歳戊戌潤極月二日、瀧上寺下和州芳野郡黒滝郷寺堂村惣道場遍照寺」 方便法身画像裏書「和州吉野郡河分村惣、道場、寛永元年(1624)甲子五月廿日、釋准如(花押)」
光照寺(本)	中戸	本尊阿弥陀如来立像(元禄八年(1695)一月十五日本山下付) (備)伝、文禄四年(1595)五月八日瀧上寺第十三世浄久法師創立
正光寺(本)	中戸	本尊阿弥陀如来像(寛永九年(1632)十二月本山下付)
善龍寺(本)	赤滝	本尊阿弥陀如来像(寛永六年(1629)本山下付)
聞光寺(本)	脇川	本尊阿弥陀如来立像(寛保三年(1743)本山下付)
滝光寺(谷)	槇尾	(備)元本願寺派、滝金寺と称し寛保三年に大谷派に転じた。 「和州吉野郡鳥栖村惣道場也、寛永元年甲子八月二九日、釈准如(花押)」 (備)方便法身尊像、六字名号掛け図あり。
西光寺(本)	鳥住	本尊阿弥陀如来立像(慶長十九年(1614)准如上人下付) (備)伝蓮如上人六字尊号
正西寺(本)	栗飯谷	伝実如上人十字尊号

(注) 1. (本)は浄土真宗本願寺派、(谷)は浄土真宗大谷派の略で、それぞれに末寺の意味である。
(備)は備考の略。

2. ここに示したのは、その寺の遺品の内、現在、年号の明確なものを中心に示した。備考には、年代明示できないが、それよりもまだ時代が古いであろうものを示した。
3. この表は、全面的に『黒滝村史』寺院の部、土井実氏の調査によって作成した。詳細な調査であり、教示されることが多かった。記して謝意を表する。

4ヶ月ぐらいおく。樽丸の木を切る場合、難しいので、慣れた人でないといけない。株と木を離れないように倒す。「マルヤの木切り」というと木を倒す名人の代名詞でもある。

樽丸師の仕事：春、4月に切り、3、4ヶ月おくと、杉は赤身を帯びてきて土用頃に小切りをする。この頃から、樽丸師さんは山へ小屋をかけて作業をする。作業は、先にサキヤマ師が間ギリノコ（尺8寸のノコギリ）とハニシカク（コマビキ）を持って、4月に倒した木をケンギリしにゆく。ケンギリとは、1尺4寸に切ることである。倒した木で、4つか5つぐらいにケンギリをして、その近くにリンバ（平らな所）を作りコギった木を集める。サキヤマ師さんは、4日仕事をし、5日目の昼から休むのでシクハンという言葉がある。5日目、昼にゼンザイを食べ、道具を直し、洗濯をする。

コギったものを、山小屋（コバカケ）でワリヤさんとサキ（ケズリ）とが作業をする。ワリヤさんが技術的に上位で、サキをする人はワリヤさんに学んでゆく。器用な人・不器用な人があり、不器用な人はワリヤさんになれないこともある。ワリヤさんは、常に4枚割ってゆくようにする。1番外側をコワ（これは割り箸に使用）、次にコウツキで、1番良い樽丸。4枚に割ってゆくというのは、2枚だと一方に、マケができ削げる。ワリヤさんは、槌と割り包丁を使用する。サキは、マエアテを腹に付け、内セン・外センで削って

ゆく。削ったものを、カシキが井型に組んで干してゆく。長くて20日程、陽に当てて干す。カシキとは、食事の準備やホシヤをしたりする補助員である。

朝、コトボシをつけて暗くから作業をし、昼を食べて半時間して、又、作業にかかり、夜は暗くなって終わるので、アサボシヨボシの仕事であった。

親方の買った山が広がったら、樽丸師のグループが3、4組山に入り小屋掛けするので、競争であった。1年間の仕事は、11月頃から山に入り、旧正月に山から家に帰り、6月頃まで家におり、7月のはじめの夏祭りが終わってから山に入り、一旦、盆に帰り、又、山に入り、報恩講時分に帰る。

（あとがき）黒滝村赤滝への民俗調査は、平成2年11月3日、12月6日、12月7日、平成3年6月15日、7月4日に浦西勉、徳田陽子が「吉野の山村と伝承文化」展の為に行なったものである。この地域の民俗調査の報告は、『黒滝村史』のみで、余り多くを見ないので実施したものである。今回その一部を浦西がまとめた。次の方々から貴重な話をうかがった。御芳名を記して感謝の意を表わす。
植田宗太郎氏（明治44年生まれ）赤滝住
大西実義氏（大正2年生まれ）赤滝住
亀井正三氏（大正5年生まれ）中戸住
また、黒滝村教育委員会の日浦義文先生には何かと便宜をはかっていただいた。末尾ながら併せて御礼申し上げます。

お知らせ

●民俗博物館展示ご案内

〔収蔵品展〕

まつるころとかたち

— 祈願・鎮魂・報賽 —

〔期 間〕 平成5年1月5日から8月29日

〔常設展〕

大和の生業

(1)大和の農村のくらし

・稲作 ・大和のお茶

(2)大和の山村のくらし

・山の仕事

博物館ご利用のてびき

開館時間 館内 午前9時～午後5時

（ただし入館は4時30分まで）

民家 午前9時～午後4時

（博物館および民家の見学所要時間は）
約1時間30分

観 覧 料 博物館 大人 学生 小人
個人 200円 150円 70円
団体 150円 100円 50円
（20名以上）

※入園および民家見学は無料

休 館 日 毎週月曜日

（その日が休日のときは翌日）

年末年始（12月28日～1月4日）